

経験の違いから捉えた舞踊運動の習得過程に関する研究

—舞踊運動習得の初期段階に着目して—

Examination of the process of mastering dance movements viewed from the difference in experience: Focusing on the early stage of learning

高野 美和子

Miwako TAKANO

Abstract

The purpose of this study was to clarify the characteristics of experienced dancers in mastering dance movements compared to non-experienced dancers, focusing on the early stage in the process of learning a series of sequential dance movements.

We developed two experimental methods. First, five dancers with experience in a dance company and five non-experienced dancers mastered and performed two types of dances differing in difficulty. First, the participants gave a movement-by-movement commentary on anything that came to mind while watching film of the learning process. Second, students majoring in dance in the sophomore class of our university watched the film to assess the level of mastery of the sequential movements. From the two experimental methods, we analyzed the characteristics of experienced dancers compared to non-experienced dancers. The results were as follows :

- 1) Comments from experienced dancers were different from non-experienced dancers, showing a difference in awareness.
- 2) In mastering the dances, the experienced dancers tended to grasp the outline of movements before mastering the rest while focusing on impressive movements, rhythm counting, or descriptions as a guide. Also, the dancers captured the instructor's movements via the mirror when necessary to compare to their own movements.
- 3) In the early stage of learning the dances, experienced dancers were more aware of how they should dance than mastering the movements as the goal.
- 4) Our students' assessments showed that experienced dancers more accurately executed the instructor's dance movements and more successfully mastered both dances than non-experienced dancers, which was verification of the skills gained from experience.

Consequently, we identified the existence of differences in the levels of awareness and the skills of experienced dancers even in the early stage of learning dance movements.

Keywords : mastery of dance movements learning process experienced dancers

I. 研究目的

あらかじめ振付の定まっている舞踊運動の習得は、ダンスクラスや公演リハーサル、オーディションなど様々な舞踊の現場で日常的に行われており、即興で自

由に踊る場合でない限り、演舞者たちは示範の示す舞踊運動を再現できるように、まず始めに振りを自分の体に覚えこませる。また、オーディションなど限られた時間の中では、ダンサーたちは素早く示された振付を理解し、覚え、それを演舞へとつなげていくことが求められる。この一連の流れを持った舞踊の振付を初めて見て、その場で振付の流れを覚えていく初期段階

では、ダンサーたちはどのようにそれらの動きを捉え、自分のものにしていくのであろうか。果たして熟練者と未熟練者ではその習得方法や意識に違いがあるのだろうか。

これまで、舞踊運動を習得していく過程についての研究では、島内が、異なる質感を持つダンスフレーズの踊り方について、熟練者と未熟練者間に現れる動きの違いを明らかにしている¹⁰⁾。また、テーマ性を持つ振付作品の演舞の習熟過程に着目し、演舞者の意識や気づきの特徴を検討している¹¹⁾。しかし、舞踊運動習得の初期段階において、初めて示される動きの流れを捉え、習得していくプロセスについて、熟練者と未熟練者の間で特徴を見ていく実証的な研究はない。マイネルは運動習熟の過程を、第1位相：粗形態における基礎経過の獲得：運動の粗協調、第2位相：修正、洗練、分化：運動の精協調、第3位相：定着と変化条件への適応：運動の安定化の3つに分けているが⁴⁾⁷⁾、この第1位相の新しい運動が荒削りではあるが秩序のある「基礎図式」として捉えられる段階において、舞踊の場合はどのように舞踊運動（振り）が捉えられるのであろうか。そこで、本研究では、一連の振りの流れを持った舞踊運動の習得過程における初期段階に焦点をあて、熟練者たちがどのように舞踊運動の流れをつかんでいくのか、未熟練者と比較しながら、その特徴を明らかにし、本学舞踊学専攻の学生たちへの今後の指導に役立つ基礎資料を得ることを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

本学舞踊学専攻卒業生で、様々なダンスカンパニーのオーディションに合格歴があり、ダンスカンパニーの中で振付アシスタントの経験を持つ5名のダンサー（以下熟練者A～E）と舞踊学専攻1年生5名（以下未熟練者F～J）を対象に、示範者が2種類の舞踊運動（振付1、振付2）を示し、被験者にはその場でそれらの動きを習得し、実演してもらう実験を行った。その直後に、習得中のVTRを見ながら、実況的な内

省報告をしてもらった（内省報告で意味の分かりづらい部分については補助的に実験者から言葉による確認を行った）。その後、被験者たちの舞踊運動の実演映像を舞踊学専攻2年生によって、提示した舞踊運動の一連の流れを習得できているかVTRを見ながら評価してもらう観照実験を行った。

1. 実験調査

- 1) 実験期間・場所：平成24年5月～7月、本学体育ホール及びトクヨ体育館
- 2) 対象者：本学舞踊学専攻卒業生5名（熟練者：A～E）平均年齢24.8歳
本学舞踊学専攻1年生5名（未熟練者：F～J）平均年齢18.6歳（オーディション未経験）
- 3) 示範者：本学舞踊学専攻卒業生（ダンスカンパニーにて振付アシスタントの経験を有し、指導が適切にできるものとして選定）
- 4) 実験内容

① 振付

提示する振付は、ジャンルやスタイルが偏らないように、なるべくシンプルでベーシックな動きの連続からなる構成で、方向の変化や移動の伴わない「振付1」と、ターンやジャンプ、床への転がりなど方向や高さの変化、移動を含む「振付2」の2種類をオリジナルに準備した。2種類の振付を用いることで、単純な構成の振付1とやや複雑な構成の振付2の間で被験者に習得上の差や特徴が現れるかを見ることとした。また、使用曲は、シンプルでカウントの取りやすい8ビートの曲を選び、振付1、2とも同じ曲を用いた。以下はその詳細である。

◆振付1

構成：長さ約20秒（8×4カウント）。正面を向いたまま定点で腕や足の動きの変化が連続的に起こり、途中でアクセントのついた動きや倍速で刻む振りが入っている（表1-①参照）。

表1-① 振付1の内容

1-1 (8カウント)	1-2 (8カウント)	1-3 (8カウント)	1-4 (8カウント)
右ひじを上げ、肘下を外回しで広げ、内側へたたみ、右手を左肩へ移動、斜めに胸、腹をなぞり体側へ。	両手を横へ広げ（アクセント）、体側へ戻し脇の下へ（アクセント）、体側を経由して横へ広げ上へ。	両肘を曲げ、伸ばし、両腕が両前を通って後ろ、左足も後ろへ出し、両腕が再び前で左腿上げから直立、右足を右へすばやく出してゆっくり戻す。	右足を横へ、左足を横へ、右足を横へ、直立、両足で横へ踵、つま先、踵の順で開き、両肘を上げ、踵、つま先、踵の順で閉じ、両肘を体側へ戻す。

◆振付 2

構成：長さ約 50 秒（8 × 10 カウント）。腕の細かい身振りから始まり、ターンやジャンプ、床で

の転がり、バットマンやアラベスクなどの動きが連続的に短時間の中に盛り込まれており、方向や高さの変化、移動を伴っている（表 1-②参照）。

表 1-② 振付 2 の内容

2-1 (8 カウント)	2-2 (8 カウント)	2-3 (8 カウント)	2-4 (8 カウント)
左肘を 2 回右手でなで、2 回目で掴み、放り投げ、キャッチして小指から手を開いて落とす。	右手、左手、右手の順に体に巻きつけ自転し、真上にジャンプ、頭上で右手を左手で取りそれを床に下ろし、両手、右足、左足、右膝、右肘の順に床につく。	腕を輪のようにして右側に転がり、右足を軸にアラベスクのように立ち上がり、両手を前で揺らしながら上体を起こす。	左足に乗り換え右膝を抱え、両手と足を開いてから左半身をくぐらせ左手を下からすくい、右足から 3 歩で右回りステップターン。その最中両手で頭上に輪をつくり、それを下へ持ってくる。その輪に右手を上から突き刺しながら、右足から 3 歩で左回りステップターンで正面に戻り、右手は横に上げる。
2-5 (8 カウント)	2-6 (8 カウント)	2-7 (8 カウント)	2-8 (8 カウント)
右膝のみカクンと曲げ、右半身が脱力した反動で左足軸で両手で輪をつくり、その両手が天井を通過しながら右回り、右左とステップし、右足と右掌を前へ出す。	右掌を下へ返し、右足から 6 歩右回り円周上を歩き、横向きで膝を抱えて座る（体育座り）。	両肩を上げながら膝をギュッととかかえて後ろにごろんと倒れ、戻ってきて両手、右膝、左足を床につけた後、右膝下を外側へ開き床につける。	左足を右足の方の床へつき、上体、両手を起こし、両手を後ろ床につき体重を乗せて、両足をさらに後ろへ着地させ正面に起き上る。右足軸で左膝を曲げてインアウトさせて両手を開きながら左脚をバットマン後、犬の字ジャンプ。
2-9 (8 カウント)	2-10 (8 カウント)		
左斜め前に右足をゆっくり一歩出し、そこに乗りながら、左足を後ろに上げて背中をフラットに床と並行にしながらアラベスクで顔を右側に回す。	アラベスクでリフトしている左脚の膝を曲げながら、両手と共に左腿を前に上げるようにしてから直立する。		

◆使用曲…アルバム名：Trainspotting，曲名：Trainspotting，作曲者：Primal Scream

② 実験の手順

振付 1, 2 とも、示範者が下記の順番に 8 回動きを示していき、被験者は自分の好きな場所に立って、振付を習得する（示範者の立ち位置は鏡から 6 m の位置で鏡を正面とした）。各回の途中で必ず 20 秒のインターバルを設け、その間被験者は自由にフロアを使ってよいこと、習得中被験者から示範者への質問はできないこととした。示範 4 回目と 8 回目の後に、被験者にその時点でできる限りの振付の再現演技をしてもらった。

- 1 標準速度 5 解説（動きの説明）付
 - 2 スロー速度 6 解説（カウント説明含む）付
 - 3 標準速度 7 標準速度
 - 4 スロー速度 8 標準速度
- ◇被験者による実演 1 ◇被験者による実演 2

上記の実験直後に 1～8 回の習得状況および実演を撮影した映像を被験者に見てもらいながら、その時の意識の状態や感じていた事柄を中心に実況中継的に報告してもらいインタビューを行い、その様子を収録した。また、最終的に振り返りの意味で質問紙に答えてもらった。

2. 観照調査

実験調査で得られた振付 1 と振付 2 の被験者それぞれの実演映像を本学舞踊学専攻 2 年生 78 名に見せ、アンケートに回答する形式で観照調査を行った。観照者が見た映像は、教室内に設置したテレビ画面にて上映され、示範者の模範演技と被験者の演技を同画面に示すことで、観照者はそれらを比較しながら評価し、配られた 5 段階の選択肢（「できている」・「ほぼできている」・「ややできている」・「あまりできていない」・

「できていない」) かなるアンケートに回答した。なお、映像の熟練者、未熟練者の配列はランダムにし、人物が特定できないように顔にモザイク処理を行った。その後の分析では、「できている」を5点、「ほぼできている」を4点、「ややできている」を3点、「あまりできていない」を2点、「できていない」を1点と数値化して分析を行った。

Ⅲ. 結果の処理

1. 実験の結果処理方法

〈内省報告の分析〉

KJ法に基づき、被験者全員の内省報告の全てを文章に起こし、ひとつの意味を担っている文章のまとまりごとに区切り、意味上からその内容を分析し、カテゴリーごとに分類、整理したものを熟練者と未熟練者間との間で比較検討した。

2. 観照調査の結果処理方法

〈アンケート結果の処理〉

観照者78名から得られたアンケートのうち有効回答のあった75名分の回答の合計得点(5×75=375点満点)の平均値について、熟練者の映像と未熟練者の映像の間で観照者の回答選択に違いが見られるか、平均値の差の検定(t検定)を行った。これは振付1と振付2それぞれ別に行った。

Ⅳ. 結果と考察

1. 実験の結果と考察

内省報告によって得られた被験者のコメントから、意味分析作業の結果、細かいカテゴリー(①, ②…等)が抽出でき、それらを整理した結果、下記に示す1)~3)の項目の中に分類することができた。それらを熟練者、未熟練者間で比較しながら結果を検討していき、内省全体を要約すると表4のようにまとめられた。なお[]内は全内省報告中のカテゴリー別のコメント数である。

1) 動きに対する印象

① 捉えづらいと感じた部分 [75(熟:39, 未:36)]

熟練者、未熟練者とも、〈ここが肝だな、本題はこ

こで:A〉、〈ゆらゆらの後がわかりづらい:B〉、〈思い出せない鬼門みたいところがあって:C〉、〈インアウトジャンプが抜ける:F〉、〈ゆらゆらの後からのターンからがまるっきり入ってこなくて:J〉など、振付を習得する中で、捉えづらい部分を意識しており、表2-①からもわかるように振付2の(2-4)(2-5)のターンの連続移動部分は被験者D以外全員が捉えづらい部分だと意識していた。

② 印象的で捉えやすいと感じた部分 [35(熟:17, 未:18)]

熟練者、未熟練者とも、〈(体育座りからの部分が)感覚的に興味がある:A〉、〈最初に見て、好きなポイントとかあったらそこだけは絶対に外さないように:C〉、〈(腕を広げるアクセントの)印象的なところは覚えている:D〉、〈(手振りとかターンの連続部分が)わ~好き!と思って、お気に入りさささと覚えて:E〉、〈体育座りからごろんは印象的で覚えている:G〉、〈体育座り、この辺りが動きに特徴があって入ってきた:H〉など、印象的で、すぐに体に入ってくる振りを認識し、特に熟練者はそれらを好意的に捉え、覚える上での足がかりとしていることがわかった。また、表2-②からわかるように、既に経験したことのある振りや体育座りなど日常的に認識しやすい振りは捉えやすいと感じていることがわかった。

2) 振りを捉える工夫

① 振りを捉える手順 [66(熟:38, 未:28)]

熟練者は振りを示された初見の時に、〈全体を把握するために、自分は動かずに…まず見て:A〉、〈何となく振りを流れるにぞっくり目で確認しよう…全体的な絵を:B〉、〈全体の流れをみています:D〉など、まず自分は動かずに示範の示す振りの全体を捉えようとする意識があり、その後、〈細かいピースに分けて覚える:A〉、〈わかることからクリアにする:B〉、〈目安をつくってその間を埋めていく感じ:C〉など、熟練者のコメントに共通して、まず全体の流れをしっかりと目で捉えた後、部分的に見ていき、自分なりの目安やポイントを作って習得していくという特徴がみられた[37]。一方、未熟練者は、〈動きを追う感じ…、覚えられないことに囚われて:F〉、〈示範の人の動きを追っかけて:G〉、〈手や足の詳しい動かし方を見て:H〉、〈手の動きを集中して見ていた…完全にわかったと思わないと次に進めない:I〉、〈最初の手振りしか印象に残ってない:I〉など、目の前の振りを追いながら、部分に注目しているコメントが目立った[13]。

表2-① 捉えづらいつと感じた部分

熟練者	A	B	C	D	E
振付1	特になし	・リズム、カウント、同じような振りが続くけど同じじゃない。	・体重移動の部分 (1-3)	・腿上げから後の速い部分 (1-3)	特になし
振付2	・振りの長さ ・ターンの連続移動 (2-4, 2-5) ・インアウト (2-8)	・ターンの連続移動 (2-4, 2-5)	・手を体に巻きつける所 (2-2) ・ターンの連続移動 (2-4, 2-5) ・インアウト (2-8)	・手振り (2-1) ・右膝カタン (2-5) ・インアウト (2-8)	・ターンの連続移動 (2-4, 2-5) ・バットマン (2-8)
未熟練者	F	G	H	I	J
振付1	・足さばき、右右左右、踵つま先踵、腕の流れ (1-4)	・最初の腕の軌跡 (1-1)	・手の軌跡 (1-1) ・腿上げあとからの速い足さばき (1-3後半から1-4)	・最初の手のカウント (1-1) ・腿上げ後の右足出してひっこめる部分 (1-3後半)	・最初の手の軌跡 (1-1) ・腿上げあとからの速い足さばき (1-3後半から1-4)
振付2	・ターンの連続移動 (2-4, 2-5)	・ターンの連続移動 (2-4, 2-5)	・ターンの連続移動 (2-4, 2-5)	・ターンの連続移動 (2-4, 2-5) ・床から起き上がるところ (2-8前半)	・ターンの連続移動 (2-4, 2-5) ・床からの立ち上がり (2-8前半)

表2-② 印象的で捉えやすいと感じた部分

熟練者	A	B	C	D	E
振付1	特になし	特になし	特になし	・腕を広げるアクセントの所 (1-2)	特になし
振付2	・体育座りからの部分 (2-6, 2-7前半)	・最初の手振り (2-1)	・最初の手振り (2-1) ・床からの起き上がり (2-7最後, 2-8始め)	・手のゆらゆら (2-3最後) ・体育座りの部分 (2-6)	・最初の手振り (2-1) ・ターンの連続移動 (2-4, 2-5) ・体育座りの部分 (2-6) ・フラットバック (2-9最後)
未熟練者	F	G	H	I	J
振付1	特になし	特になし	特になし	特になし	・踵つま先踵 (1-4後半)
振付2	・体育座りの部分 (2-6) ・フラットバックアラベスク (2-9最後, 2-10)	・最初の手振り (2-1) ・体育座りの部分 (2-6) ・インアウト (2-8) ・フラットバック (2-9)	・体育座りの部分 (2-6) ・インアウト (2-8)	・体育座りの部分 (2-6)	・体育座りの部分 (2-6) ・インアウト (2-8)

② カウント [80 (熟: 45, 未: 35)]

示範中にカウントの解説があったが、熟練者は、〈8区切りくらいポイントだけ顕著なカウントを自分の中に入れて: B〉、〈8の頭を目印にするようにして: C〉、〈覚えている振りのところだけカウントを入れて: D〉、〈ポイントとなるカウントの所だけ覚えて: E〉など、部分的に目印となるカウントを意識していることが伺えた。一方未熟練者は、〈動きを覚えていなかったのかカウントをいわれても聞いてない: F〉、〈カウントでやろうとしたけど振りが曖昧でなかなかカウントが入ってこない: G〉、〈結構数字で覚えるので

カウントを意識してやってる: H〉、〈カウントがわからなくてカウントを知りたい: I〉など、振りを捉える際にカウントを重視する傾向にあるが、示されたカウントの情報をうまく利用できていないことが伺えた。

③ 言葉 [61 (熟: 38, 未: 23)]

示範中の解説で使用された言葉に対して、〈それぞれの言葉をインプットして…さっきの言葉を思い出しながら: B〉、〈言葉があると一個一個の動きの輪郭がはっきりする: C〉、〈「小指から」とか…何となく覚えてるところが明確になった: D〉、〈解説が入ったほ

うが分かりやすくして：F) など、被験者全員が解説の言葉を振りを覚える上での手がかりとしていることが内省コメントから明らかになった。

④ 鏡の利用 [58 (熟：21, 未：37)]

振りを目で捉える際に、熟練者、未熟練者ともに、〈見えなところは鏡で示範を見て：A〉、〈示範が見えないとき鏡を使ってる：C〉、〈鏡で前からも示範を見ていた：I〉、〈最後だからかすかに示範の面影を視野に入れておいて基本的には自分ひとりで踊っているような感じで：B〉、〈示範は直視しないで、視界に入れておいて自信がないときに目に入ってくるようにして：C〉、〈鏡で自分と示範の動きを視野に入れて間違っているところをチェックして：H〉など、始めは示範や鏡に映る示範の像を漏れなく取り入れながら、

徐々に鏡に映る自分の像と示範の像を比較する作業へ移行し、終盤では鏡や示範をわずかに視野に入れながら、自分が主体的に踊れるようになるべく示範や鏡を見ないというような、段階を踏んだ鏡の利用の姿勢が伺えた。また、表3からもわかるように、鏡による自分と示範の比較について、移動がなく正面の姿勢の多い振付1では熟練者の方がより多くの回で鏡を利用しながら比較修正を行っていることがわかり、熟練者は未熟練者に比べ、早い段階で振りを捉え、比較する余裕があったと推測できる。しかし、回転や移動の多い振付2では被験者全員が振付1に比べ鏡でのチェックが減っており、視界の変化の多い振付2では物理的に鏡での比較チェックがしづらい状況であったことが推測できる。

表3 振付1, 2の鏡の利用 ●:直接示範を見る ○:鏡越しに示範を見る □:鏡越しに自分を見る (): 僅かに鏡を利用

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
振付1	1	●	○	○●	○●	●	●	○	●	●	○●
	2	○●	○	○●	○●	○●	○●	○	●	●	○●
	3	○●	○□	○□ (●)	○●	○□	○●	○	○●	○●	○
	4	○●	○□	○□ (●)	○□	○□	○●	○	○	○	○
	5	○□	○□	○□ (●)	○□	○□	○●	○	○	○	○
	6	○□	○□	□ (○)	○□	○□	○●	○□	○	○	○
	7	○□	○□	□ (○)	○□	○□	○●□	○□	□ (○)	□ (○)	□ (○)
	8	○□	□ (○)	□ (○)	○□	□ (○)	○□	○□	□ (○)	□ (○)	□ (○)
振付2	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
	1	○●	○●	○●	●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	2	○●	○●	○●	●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	3	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	4	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	5	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●	○●
	6	○●	○●	○●	○●	○●□	○●	○●	○●□	○●	○●
	7	○●	□ (○)	○●	○●	○●□	○●	○●	○●□	○●	○●
8	○●	□ (○)	□ (○)	○●□	○●□	○●	○●	○●□	○●	○●	

表4 内省全体からみた熟練者と未熟練者の特徴

熟練者	未熟練者
<ul style="list-style-type: none"> ・全体の流れを大きく捉えてから、印象的な動きやカウント、言葉を目印にして、その他の部分をつかんでいく。 ・捉えづらい振りは意識的にマークしておく。 ・鏡、示範、自分の像、自分の体感を照らし合わせながら振りを捉える。 ・振りを覚えることが目的ではなく、自分がその振りを踊る主体になっていけるように意識している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・示範の振りを追ってしまい、自分1人になるとできない。 ・1つわからない振りに囚われると先に進めない。 ・カウントがわからないと不安、カウントを重視している。 ・全体を捉えようと動かずに見た後、実際動けない。いつ示範を見て、いつ自分が動くのかがわからない。

3) 振りを捉える時の心掛け, ポイント [26 (熟: 24, 未: 2)]

熟練者それぞれが自分の中で振付を捉える際に心掛けていた事柄のコメントが得られ、中でも、〈振りをきちんと覚えてそれをだれかに伝達できるようにと思ってやっていた: B〉, 〈形にとらわれず、動きの意味を早く捉えられるように: C〉, 〈どこに振りのおいしさがあるのか見つけられた時が楽しい: D〉, 〈覚えた後の繋げて踊れる楽しさを考えてモチベーションを上げる: E〉 など、振りを覚えることの先にあること、振りをどう自分なりに踊るかや自分のものにするかという意識、振りを覚えることが最終目的でないことが伺えるコメントが得られた。また、〈鬼門のところを考えすぎるとできなくなるから、とにかく次! 次! って自分の体に任せるようにして…完璧にできることだけがいいことではない、自分が踊っているという意識で: C〉, 〈全てを均一に覚えようとするとうごちゃごちゃになる…1つ1つ前のものを忘れても気にしないように、次! 次! と思うようにしている: B〉, 〈オーディションだったら振りを覚えてないとそこから先に行けない、先に覚えたもん勝ち: E〉 などといった、困難な状況をポジティブに捉えて次へ進む意識のコメントが得られた。

2. 観照調査の結果と考察

観照者アンケート (5段階評価) の合計得点の平均値を熟練者、未熟練者間で比較したところ、振付1では有意差は認められなかった (平均値の差の t 検定 $t(8) = 1.025$ 有意確率 0.335)。一方振付2では熟練者の方が有意に平均値が高かった (有意水準 5%, 平均値の差の t 検定 $t(8) = 3.435$ 有意確率 0.024, ただし等分散性のための Levene 検定から等分散は仮定せず)。シンプルな構成の振付1では、熟練者グループの平均は 4.3, 未熟練者グループの平均は 4.0 となり、熟練者、未熟練者ともに振付の流れをほぼ捉えられていたことが伺える。一方、ターンやジャンプ、移動を伴う振付2では、熟練者グループの平均は 4.6, 未熟練者グループの平均は 2.8 であり、両グループ間での演技評価に有意な差が認められた。このことから、熟練者たちの演技に、経験を積んだ熟練者としての質が現れていたことが伺える結果であったといえる (図1参照)。また、4つのグループの平均値の差を調べるため、多重比較 (Tukey HSD) を行ったところ、

振付1熟練者 (平均値 320.80) と振付2熟練者 (平均値 343.20) の平均値の差は有意ではなかった (平均値の差 22.4 標準誤差 31.752 有意確率 0.893)。これは、熟練者にとっては振付1も振付2も同じように捉えることができたからだと考えられる。これに対して平均値に差がでたのは、振付2熟練者 > 振付2未熟練者 (有意水準 5%, 平均値の差 131.6 標準誤差 31.752 有意確率 0.004), 振付1未熟練者 > 振付2未熟練者 (平均値の差 85.2 標準誤差 31.752 有意確率 0.070), 傾向がみられたのは、振付1熟練者 > 振付2未熟練者 (平均値の差 109.2 標準誤差 31.752 有意確率 0.016) であった。すなわち、振付1に関しては、熟練者と未熟練者の得点の平均値に有意な差がないが、振付2に関しては、熟練者と未熟練者に有意な差がみられることが明らかになった (図2参照)。また未熟練者にとっては、振付1よりも振付2の習得が困難であることが明らかになった。すなわちこの振付1と振付2は、熟練者にとっては習得に差はないが、未熟練者にとっては、振付2の方が習得が困難であるということが読み取れる。

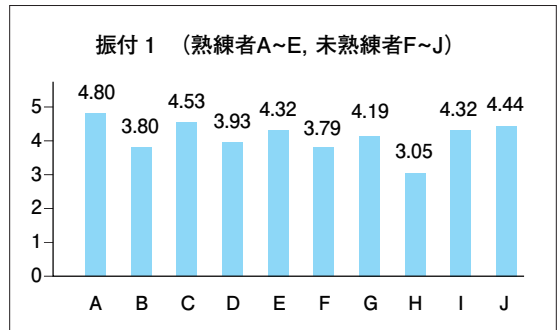


図1-① 振付1の実演映像に対する観照者の評価結果 n: 75

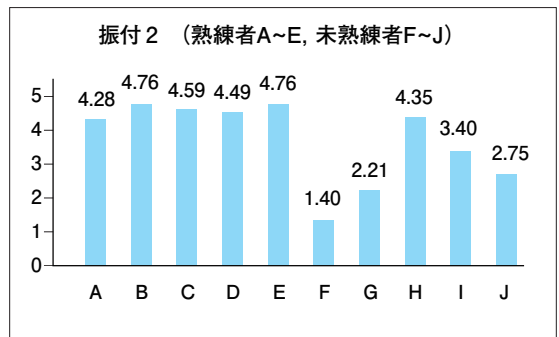
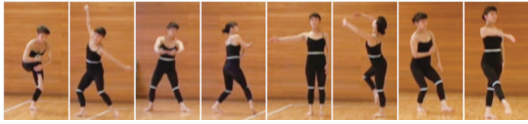


図1-② 振付2の実演映像に対する観照者の評価結果 n: 75

示範者



熟練者 E



未熟練者 F



図2 振付2の実演映像(2-4, 2-5の部分)

V. 結 論

内省報告分析結果および観照調査結果を総合し、経験を積んだ熟練者の振りを捉える初期段階における意識や心構え、演舞の様相について、以下のことが明らかになった。

- 1) 熟練者の内省コメントには未熟練者とは異なるコメントが見られ、経験による意識の違いが確認された。
- 2) 熟練者は振りを捉える際に、始めに全体の大きな流れを捉え、その後、捉えやすい印象的な動きやカウント、解説の言葉を目安にしながら未習得部分の動きを捉えていくという特徴が見られた。また、必要に応じて鏡を利用しながら示範の動きを捉え、自分の動きと比較、修正していることも明らかになった。
- 3) 熟練者は振りを捉える初期段階にありながら、振りを覚えることの先にあること、つまり、振りをどう自分なりに踊るか、自分のものにするかなど、振りを覚えることが最終目的でないことが伺

える意識を持っていることが明らかになった。

- 4) 観照調査結果から、熟練者による振付の再現演舞が未熟練者に比べ、示範の提示する振付を捉えられていること、また、熟練者は難度の異なる2種類の舞踊運動の両方を捉えることに成功していることが明らかとなり、習得した振付の再現演舞に、経験を積んだ熟練者としての質や技能が現れていたことを確認することができた。

以上、本研究の結果から、舞踊の振りを捉える初期段階において、熟練者の意識や技能に経験による違いが存在することを確認することができた。今後は、さらに多くのデータを収集し、舞踊運動の習得に役立つより具体的な指導方法を検討していきたい。

引用参考文献

- 1) 尼ヶ崎彬 (2004) ダンス・クリティーク舞踊の現在／舞踊の身体、勁草書房、東京。
- 2) 調枝孝治 (2003) 運動学習からみた動作の評価、体育の科学 53 : 9-12。
- 3) 林信恵 (1991) 身体と動きと舞踊：舞踊学講義 (舞踊教育研究会編)、pp.72-81、大修館書店、東京。
- 4) 金子明友ほか (1990) 運動学講義、pp.126-133、大修館書店、東京。
- 5) 金子明友 (2002) わぎの伝承、明和出版、東京。
- 6) 小林正佳 (1991) 踊りと身体の回路、青弓社、東京。
- 7) マイネル、K. : 金子明友訳 (1981) スポーツ運動学、大修館書店、東京。
- 8) 太田泰代 (1996) 舞踊教育における「模倣」の内包する要因に関する研究、日本女子体育大学大学院修士論文。
- 9) 佐々木健一 (1995) 「模倣」の項：美学辞典、pp.45-53、東京大学出版会、東京。
- 10) 島内敏子 (1999) ダンスムーブメントの技術理論—踊ることの熟練性、女子体育 41 (9) : 55-58。
- 11) 島内敏子、坂本秀子、今村文ほか (2005) 表現課題作品の演舞の習熟過程について、日本女子体育大学紀要 (35) : 91-98。

(平成24年9月12日受付)
(平成24年11月28日受理)